



普陀傳記

四

千厓文庫
文庫24
A594
4

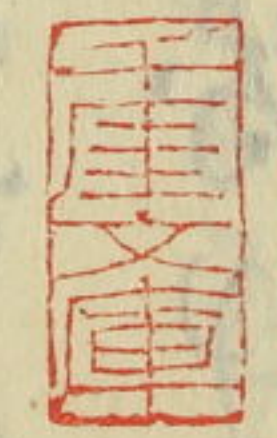


文庫24
A594
4

普陀洛傳記卷之拾



地藏尊御利益の事



地藏菩薩記は、西地蔵菩薩の御利益の事
多小異、阿お阿國羽黒山の山伏地獄廻
せんと諸王をめぐり、おろろろ、牙をみ智の
宝冠、阿中をいへ、十二因縁のむねをす
へく、是をいへ、きかきき、まんだらす。

かけをうけ 胎^た胎^た黒色のまゝさをもたや
川めのまゝんさへハ糸のまんげをふまへ
全胎^{あんたい}西部^{せいぶ}のかたちを表^{あらわ}し山伏^{やまぶし}いち小
やう虎^こ考^{かう}中^{ちゆう}立山^{りつさん}の心さし立山
まのりや前へハまやまく来るるまや
ずあんりいそもまぬ橋^{はし}もりけあり花^{はな}ふ
ぢ橋^{はし}もてむふのいじかりまかみま
一の岩^い根^ねまかゝるふどつなゆき
いかりみては橋^{はし}もあつあるをこし
り罷^はふりき悪^{あく}じうのまのハ花^{はな}おま
つるまういちまうぬん花^{はな}橋^{はし}をこたるま
向^{むか}ふまこく夜^よをあらし立山^{りつさん}のやうすをえ
んと岩^いふあーうけ大^{だい}随^{ずい}求^ぐ多^た摩^ま陀^だ尼^にをま
じうまなうりるふうしうらみなり
しとあやふま何^{なに}もあつ花^{はな}地^ちをきく
く花^{はな}くろまをさうふまはふりし

のかい、しきあるなり、何るやうにとか
そふあり、目のすくふたきある血の池ある
てくろく、とせう血、一う、う、火、えん、と、一、あがる
こり、けつ、じん、う、けん、き、地獄、といふ、あう、き、
ち、神、ん、き、ち、う、ん、つ、じん、経、お、し、何、る、地獄
ち、う、そ、を、血、る、地獄、を、い、ふ、なり、産、の
上、ま、て、死、し、ご、る、と、の、う、あ、り、と、つ、ふ、た、ふ、ハ
何、る、は、五、人、月、の、さ、こ、う、れ、は、り、と、地、小、流、
ろ、と、ふ、地、神、を、け、げ、し、あ、ふ、なり、り、れ、を、あ
神、を、け、げ、す、は、け、げ、し、の、う、くる、あ、く、し
て、み、あ、我、中、四、山、ま、来、ん、は、釋、し、き、う、を
あ、う、む、り、や、さ、ず、若、き、こ、う、り、く、之、佛、法、
の、心、も、な、く、着、し、ふ、い、ふ、死、す、る、な、い、と、あ
は、地獄、う、かつ、り、あ、ふ、何、り、罪、科、あ、が、
あ、し、と、思、く、と、かく、地、神、水、神、を、け、げ、し
ふ、ら、つ、と、あ、り、て、地、ぢ、く、小、流、を、あ、ん

き地獄ぢごくよりく是ハ女とりりありときハ女
よりぢごくの池のまへふきつ裸はだかなる疾
る小風きり吹ふき来りてまたる血を女のほへ
かりしむじくるーみありんきば垢かみまふ
てもあらば危あやめてもなまへもそりむわき
も池の中よりくるしきいうあるはみり何
つゝは危も砂ぢごくまおちたら我を陸
求もとむしを喝かへ飛り小一通り其風さめり
吹ふ来りて其池いけ雲のちるがぢごくふきより
きりてえの山となるまきるきりふ女の
こゑみくりの山伏をすひかくるふ山伏も
大ハおそろきかやうのふてあやしきる
をがそろつきり何はしてそてききとえあを
し何よりおとそふそきりハ諸こく池いけ伏
かきり四人きりけりきりきり何方へあを
きり何りやきりきりふいりふも諸しよ玉きりる

あてかる身のうへなりふいづくと定め
くるるあし何ものゆゑもかくいふを
まふふあ^{まが}ぬく^{まが}まを^{まが}め^{まが}ふ^{まが}けし
まふ^{まが}く^{まが}東^{ひがし}洞^{どう}院^{いん}を^{まが}あて^{まが}何^{まが}りし
いふもの、むすめなりあり女の身代りな
しきハ地神を神をけけしつるつみ若
きゆく仙^{せん}位の公さしりなくくせし
まふ^{まが}に^{まが}十八^{まが}やま^{まが}く^{まが}死^{まが}し^{まが}つ^{まが}ハ^{まが}ま^{まが}くる
しき^{まが}う^{まが}くる^{まが}わ^{まが}し^{まが}き^{まが}京^{まが}都^{まが}の^{まが}ち^{まが}も^{まが}し
修^{しゆ}り^{まが}ふ^{まが}こ^{まが}し^{まが}何^{まが}の^{まが}ま^{まが}る^{まが}親^{まが}里^{まが}
一^{まが}由^{まが}を^{まが}は^{まが}ひ^{まが}あ^{まが}て^{まが}ま^{まが}ハ^{まが}衣^{まが}類^{まが}の^{まが}あ^{まが}り
何^{まが}り^{まが}を^{まが}ま^{まが}し^{まが}あ^{まが}ぬ^{まが}ま^{まが}し^{まが}て^{まが}あ^{まが}地^{まが}を^{まが}
ま^{まが}る^{まが}何^{まが}る^{まが}成^{まが}佛^{まが}は^{まが}は^{まが}ま^{まが}う^{まが}ふ^{まが}こ^{まが}む^{まが}ふ^{まが}い^{まが}ま^{まが}
ま^{まが}し^{まが}と^{まが}作^{まが}つ^{まが}つ^{まが}ら^{まが}も^{まが}ま^{まが}る^{まが}何^{まが}る^{まが}なり
りし^{まが}れ^{まが}父^{まが}母^{まが}や^{まが}とい^{まが}ふ^{まが}ハ^{まが}仙^{まが}神^{まが}何^{まが}る^{まが}の
中^{まが}あ^{まが}て^{まが}地^{まが}を^{まが}あ^{まが}る^{まが}ま^{まが}る^{まが}り^{まが}さ^{まが}し

ぬりきいひかみとつふおしきふられらうま
の上よりぐりなる縁ありく地衣きの
阿ふれきとるが立夜ふたびのせけん
若をつなをきつゝいふくも地衣き
あふり代りてせめ若をうけぬふより
つなツハ脚りりゆく不思義のし縁ふ
そ父母の市へとつてといひし成佛
をあらふんとするあひ山ふしきを

ゆきいふのゆきやさるハ是より
若子のなり東の洞院ふ糸一居きき
くきくすはきさぐし心安く思る
ゆき去あきききなる神持あくて
そあ親の念点ゆききききききき
まききこハききハきききの母をきき
ちきき母院の記をきききききき
りの時後法ありきききききき

うり何れもくぬく——地を渡るの
利益をそきふ地を渡るにちうい
ろくろくいむけの陽杖（あざき）をもて
むひくが——より縁（えん）ありまのハを
けさくひやんこそ一る、午立地獄に
中をうづめぐるむひ地をくぐら
みぬつけをこぼしてゆけぬ、その
事——うけあうて何らまの——

の地を渡るやうおもひまう、只、人
南（みな）世（よ）延（のび）有（あ）地を渡るを今やあが
みまう——まう、以縁とあらう六
度の路をたづね、みゆけ下さうな
り、は——をいひつゝくぬく、む
風吹きこつて、声をもあしきく
うせたる山伏、路をたづね、むさし
あしこり、むさし、むさし、むさし

洞虎子何う——とたつ糸四く刀を以
娘の死——あるまじうやとこふとや
いどけらるむらめを死せいでふ中
陰ありとふそむう——ふ果河おぬ
の玉の玉のうへ諸おゆ人の玉のありけ
此越中玄山へ山上い——いところふ
ぎのころあそび死ささふき——娘子と過
ころあ川がんだ地さくへ海舟となく

くの通くゆく何とやらせういゆや海
際なくをある親のそく——んま——と
やととハナシのそ——そと院とと
母子と此物縁の流法とゆれ——時
もろくとやされれむあるやととと
ま——とせうとそらうとととととと
はとととととととととととととととと
越——とととととととととととととととと
地とととととととととととととととと

とふ不便ふびんのりやうとある親おのちげも
いじんるちやう山やま杖つゑをけついとるい
くむなげうとていしてけしるあり
けしる又親おのつせやせふまゝとて
けしるとてきしるもあまんけう
いふく成せい佛ぶつありやうとていふれとる
衣い類るいを地ち衣いとてけしるを弟あにい
めふとてや一のりちきといふりて
とていふとていふくの地ち衣いとてけしる
衣い類るいを地ち衣いとてけしるを弟あにい
けしる一いっ周しゅうとてけしる二親ふたおとて
けしる家のうちいふとてけしる
けしる功こう法ぽうとてけしる極ごく樂らく海かいとて成せい佛ぶつ
けしる所ところとてけしるけしるけしる
けしるけしるけしるけしるけしる
成せい佛ぶつとてけしるけしるけしる

るゆへ小信心にあらずとのまゝめあり

十二番迄に金堂なる寺観世音
少も観音菩薩徳を尚の建ちて

越前あぢがの玉みうけのゆは此の書は天分

玉海たまうみてはふへるる懐徳ありふ

この春法あきを誕生たんじやうを誕生たんじやうは

りしそ田まき風ふう二年六月十日又春院

初尚の兄ハ安ふといふ人あり時ときは

海うみ人ひととちがひ生なましつゝ時ときは

なく云いふとくは笑わらひあひくニ

の時ときよりたゞを合あせしけみ

ハ是こゝ唯ただ人ひと子こゆに父母のいたるも

己おのれけてるあつしつや時ときは

あづるを何なんい夜よ毎まいにぬけあ

ハ人ひとに衆しゆあてざるうちまうく

あしあつしつめのやぶな

ちやうどいふやうな事でも毎夜の如
 きありてつゆのやうな事でもあつた
 旅のあつたあつた母の懐の時に
 りふがやうな人を見つづけるおと
 つづき幼少の頃の毎なめけあでつづ
 くゆくをえとげんをうけつづける
 幼少の頃の毎なめけあでつづける
 旅のあつたあつた母の懐の時に
 りふがやうな人を見つづけるおと
 つづき幼少の頃の毎なめけあでつづ
 くゆくをえとげんをうけつづける

ちあへるをさうしうあふそおもむ
 きあ親へかゝるはたおれはらん夜
 くかをもふああもせにこそい
 ちよのちとおもひしうすめおの時あふ
 限るさ出るさそれとあ親何をも思
 ひん病もさしめさうさうりあ玉
 けうそささけへたきおあふさなけ
 きあふ養やう沙さはえさそのはあかへしけ
 ちくさうさうさ子なるさあさ平しに
 佛ぶつたけりあるさそれハまりなく西歌さいか
 きあうさうさうさ書かあさそれさう
 けあ岩屋あさうて本の案あんあふ
 を食くあさう本食さあうさ年
 ける岩屋をかさうさうささぎや
 いげくさうさうさあさうさうさうさ
 のささ法師あさう養沙はは

なりむもさうざたうそ大徳は
とそむひ免しつらし^{おやうい}り者^いんこの
者あれも何うも何とおのまうい免は
ぬるあまいから事とすんるなり
いぞく^いあらめーめんそとつこを
つとねをあたく^いむひればうむや
ううのり者むひんこの^い屋敷^いを^い作
らうとさあ^い後あ^いくあふ^いぬる

とあふむり者^いやうく^いさいうりを^いあらめ
て又あう^いそ^いふ^いぬ^い帝^いハ^い肥^い平^い愈^いを
すう^いふせ^いむ^いひ^い何^いふ^い何^いま^いの^いお^いみ^いハ
なり^いや^い勅^い口^いあ^いふ^い若^い屋^いふ^いなり^い何
ふ^いお^い小^い聖^いこ^いそ^いも^いあ^いふ^い云^いあ^いふ^い七^い聖
からん^い御^い建^い立^いふ^いされ^いう^いと^い何^いら^い小^い勅^い免^い
あ^いつ^いと^い大^い徳^い小^い伽^い監^いを^いと^いす^い地^いを^い見^いえ
あ^いつ^いと^いみ^いと^いの^いり^いそ^いぬ^いさ^いう^い大^い徳^いを

伽藍の地を足立としてみえを造りてあふ
かみも修羅地を造りてあくるさえありいつく
そとすむく例なる大本のうちふ声あり
朽くありてき靈本うな生本のうちふ
親せきの像をきざみともちきるそせん
とふんふのちのちけ本ちせつふいた
にどしとてきくきくせんあといそん佛
神と刻ともく刻ちけくんとを立よと
執事あてい本を切二つありてふんとふて
ぎや本の目ふあふそふあを親せきの
のひきぐくありてくくい本をあてき
いふくありてくい本をともくく刻みせ
り中ふあ代の美佛なりとあり今乃
ふるちれ親せきのきなり世ふあせうき
の親せきのきなるあてきく汗を流し
なふうゆく一石にふた地獄をめぐり罪

人を助けようといふなりとぞすくのみ
たうけの親世なるもやなりけ親世
音ふかきとぞ救へるんおんの雷かみなりを
まぐひなふ雷のなる時うんらいふせんで
んかむむいおめだふ神んぴ親なる力とお
あーくせうさんと親なる代めづるを
あくる声こゑはなりあふ雷をおとすすーその
お世せいを願ねがふおふけ親世なるハ割ふのみ
なりよけとけなりとぞなりとぞなり
いふぞとぞなりとぞなりとぞなり
おくらみ山といふおありてくるみの長者
その長者お重の塔たをいふ一人ーと建た
えりお来よりよふ一天のき曇りなる
びりりして雷のききさるーくして塔の
上へおちお重の塔た忽たちちやけなりいなる
長老いせつづく建えせーお重の塔お

まゝ取の河もゆく長者のふちをぬふ
所を河くめく又水車の塔をさうつか
うもお耳くうらふみり供養とあふ
そひ又^{そひ}かきくさうびうくさいひ
りそ^りやうもびく^り塔の上ま
くらふちく^{ちく}あやうく^{あやう}てんく^{てん}うま
雷^{かみ}かちて焼^{やき}あひく^{あひ}長者^{ちやう}の歌^{うた}うち
いふ^いゆみ^ゆや^や仏^{ぶつ}の^のけ^けあき^{あき}や
あけき^ある^るける^るを^を大徳^{だいとく}時^{とき}一^一ふゆし
すく^すく^くま^まい^い雷^{かみ}ふ^ふあ^あす^すあ^あく^くも^もを
の塔^たる^るお^お大^{だい}天^{てん}の^の魔^ま王^{おう}の^のさ^さめ^めに^にけ
り^りさ^さく^くさ^さす^すに^にま^まつ^つふ^ふあ^あく^くに^にさ^さく^く長
者の^の方^{かた}へ^への^のあ^あひ^ひけ^けさ^さく^くい^いう^うる^るる^るを^をさ^さく^く
佛^{ぶつ}の^のけ^けう^うけ^けま^ます^すぬ^ぬや^やと^とあ^あふ^ふい^いあ^あく^く
さ^さく^く佛^{ぶつ}は^はう^うけ^けあ^あは^はぬ^ぬさ^さく^くふ^ふい^いあ^あく^くさ^さく^く
魔^ま王^{おう}は^はあ^あき^きな^なう^うさ^さく^くな^なあ^あん^んま^まう^う

あはれ法念てやがすすゝとあれは中
を人ときわむのかく定か事あれは金瓶
小のひちり長老の事あれはあをを
つばきあうくさうづふすめていそぎ
お重の塔とまゐる音信のせう大徳
付託たまふくわくあくお重の塔とまゐ
ぬる塔信託なるこそ大徳を人ふす
りせよとすかならず一人はよるま

こそ午の白少おまゐる大工もまゐるやい
ろやみまゐるくまゐるぬふ又お重
あつたんとくわくおそれ病を大徳
一心ふれお重をまゐるあふく塔の上
お重まゐるひさぐりくまゐるどんと
を大徳ふ初明王の要魔降伏のむく
の平を結びあつた何うはあつた
あつたあつたあつたあつたあつた

何れもよくしてゐる。何もあつて悪
難^{まづ}事^{もの}なふ朱のときた繁^{うみ}なりとふくそむ
くの縄^{おび}をきりしはちんせいの時おのこ
大六天の魔王^{すまわらひ}雷神^{らいじん}あるなるぞ如^{ごと}
ふりた山王の塔^{とう}を妬^{うね}げありゆる家
々かこのことくあむりより何ゆくる
助けをあにぞゆくをかへきと作れ
むきよといふのはさふあふまのころ

み山ふ山神あつてみまの境を建つて
はる地ふ三世三むれめ来ようか
れふ^れ地^ちとあるこれ^こわつて山神とさ
^い位のありものけ山みまむらありに位
ありくならふ境を^た建^てあらぬあり^さ場^ば
けくきよまたのみゆうくふあせしそ
ろふたふ事とある^い山^や神^かのか
うらなうそ、^い山^や神^かのいそひ

なとらる雷くあきふ猫ねこの雷とあらうる
ありは三ツの雷の況のよきやとおもふま
は外ふさぬくのせりあり

少聖きよの天満てんまん大自だいじ然ぜん天神てんじんのけんぞくふ十二
万八千の因は火雷からい神あり

猫ねこの魔障まざうとなんぬまきくく京極
ち町をきく。のうちふ何る寺のふくく年
ゆくる猫ありておと家化けして人をた

ぶふらるありといふも位いちうつふ志
とずして正の介けぬぶんぐうとふある

時猫ねこ夜よあけする位い寺の森もりうとくある
福寺をめて卯うあきふ位い寺国をさぬ

いふふとんやふあきも卯うやうふ年
を思ふる大なる猫ありて人のことくあが
ふりするやうさうしてや声こゑわはさふすく
まき位いちかきんゆめるも何なんいける

小祓ありて是の猫立ちたる様子をねむか
 らしめりて因しは入水と引さるるおのち
 念^{かん}念^んのゆるめや川へ中へはさるるまゝに
 うかひて足あがりあすふいふ趣——つ祓ぢ
 みせきふむは猫人のまゝあひやうへ
 新嘉^{しんか}ハ年十二歳いふせむ何日ものち^つ向^{むか}
 ち^ちはあり仲^{なつ}名^なの法^{ほう}式^{しき}とてけんど
 ん^ん祓^はんあるもの死——せむしよのち死が
 いを清^{きよ}うみとる^{とる}ま^まに^にあ^ありやけおとすれ
 びそりや人^{ひと}ち^ちハ世^よの^の檀^{だん}家^かの^の祓^はん^んふ
 て^てゆ^ゆと^とあ^あき^きを^をう^うけ^ける^るだ^だん^んや^や一^{いっ}の^のち^の
 ゆ^ゆふ^ふゆ^ゆ——く^くま^まよ^よと^とや^やせ^せる^るま^まあ^あら^らず
 着^ちる^るか^から^らく^くま^まよ^よと^とや^やせ^せる^るま^まあ^あら^らず
 ま^まか^かく^くふ^ふさ^さく^く——ふ^ふその^の祓^はん^んの^の死^しが
 い^いを^を清^{きよ}うみ^みと^とる^るま^まに^にあ^ありや^やけ^けお^おと^とす^すれ
 なく^{なく}ま^まよ^よと^とや^やせ^せる^るま^まあ^あら^らず

るめては少おんふも、水伝寺さぬの
あれむ^{おん}は^{おん}ふも、水けがのあきやうまゝし
中^しつゝあり^し今^しつては伝^し伝^しのあき猫^しの
少^しと又^し角^しのあき^しも、さうがく
しむ^しその利^し心^しは水晶^しの珠^しを^し持
系^しあさる^しし^し中^しのあき^し国^しを^しいう^し
おのきふそれを^しあき^し伝^しのあき^しふん
りの^し禪^し門^しの死^しが^しい^しも、さう^しは^しうみ
えて^し見る^しし^しも、さう^しは^しうみ^しをつ^しき^し
し^しあき^し来る^しあき^しし^しは^しあき^しを^しさ^し
かく^しし^しは^しあき^しし^しは^しあき^しし^しは^しあき^し
る^しの猫^しが^しし^しは^しあき^しの禪^し門^しの死^し
し^しは^しあき^しし^しは^しあき^しし^しは^しあき^し
て^しあき^しし^しは^しあき^しし^しは^しあき^し
し^しは^しあき^しし^しは^しあき^しし^しは^しあき^し
い^しあき^しし^しは^しあき^しし^しは^しあき^し

けしきあふむかきふれと印めくむを
宿坊^{しゆくぼう}よりそこをいふ^{いふ}油断^{ゆだん}なくちう^{ちう}病^{びやう}
くあり^く歳^{さい}なりおちう^{おちう}く^くの^のまある
きか^きあり^{あり}ふ^ふ油断^{ゆだん}の^のよふ^{よふ}あちう^{あちう}
不宿坊^{ふしゆくぼう}よりさず^{さず}あ^あ晶^{しやう}の^の珠^{しゆ}お^おて^てお^おも
く^くい^いく^く難^{なん}あ^あく^くせ^せく^くを^をあ^あく^くむ^むけ^けむ
い^いく^くや^やふ^ふけ^けく^くん^んき^きむ^む年^{ねん}う^うる^る
猫^{ねこ}の^のち^ちき^きある^{ある}ふ^ふい^いふ^ふく^くり^りあ^あき^きう^う氷^{こおり}晶^{しやう}
の^のお^おも^もに^にあ^あて^てう^うく^くき^き死^し一^一病^{びやう}た^たう^うい^い病^{びやう}こ
を^をま^まあ^あふ^ふ宿^{しゆく}坊^{ぼう}れ^れい^いく^くせ^せふ^ふれ^れ猫^{ねこ}
より^{より}あ^あち^ち宿^{しゆく}坊^{ぼう}の^の名^ない^い男^{おとこ}一^一く^くふ^ふ志^し
り^りき^きけ^け

又江戸ふる寺の和名あきも檀家子死
人の^{ひと}き^きむ^むむ^むい^い病^{びやう}の^のふ^ふを^を死^しきて
死^し人^{ひと}子^こ病^{びやう}なり^{なり}を^を死^しん^んく^く病^{びやう}又^{また}を^を
あ^あく^くわ^わく^くを^を死^しふ^ふあ^あて^てう^うく^く死^し一^一く^く

かすゆりなり 福舎^{ふくや}のせうふをす
あめ実れの西法をむく時をいまひ
何とにまぐくすふをたうてんえ
ぞろま海^{うみ}家^け常^{じょう}のうろてんぞろ
そそ何と一川^{いっせん}ふ^ふ海^{うみ}のてんぞろはゆ^ゆの
世^せを^を海^{うみ}く^くき^きれ^れのうろふおもひ
る是^{こゝ}ち^{こゝ}ひ^ひあ^あち^ちが^がつ^つなりはま^まむ^むせ^せい^い
ま^まか^かふ^ふて^て釋^けの^の海^{うみ}の^の世^せ界^{かい}なり

衣^い襟^えを^を糸^{いと}う^うへ^へ糸^{いと}あ^あら^らう^うの^のゆ^ゆひ^ひす^すは
相^あら^らい^いを^をあ^あら^らう^う色^{いろ}ぞ^ぞう^うと^とく^くく^くん^んゆ
と^とぞ^ぞの^のみ^みも^もゆ^ゆと^とあ^あ一^{いっ}湯^ゆあり^{あり}を
う^うと^とま^まは^は病^{びやう}あ^あら^らう^うを^をち^ちう^うち^ちむ
さ^さく^く成^{なり}る^るか^かあ^あれ^れさ^さる^る事^{こと}の^の目^めふ^ふえ^えく^くる
と^とあ^あれ^れと^とあ^あら^らう^う通^{とほ}ひ^ひ病^{びやう}の^の地^ちま^まて^てけ
う^うと^とあ^あら^らう^うの^の人^{ひと}の^の身^みの^の神^{かみ}の^のく^くさ^さき^きは^はひ^ひ
四^し十^{じゅう}八^{はち}万^{まん}の^の天^{てん}の^のあ^あら^らう^うて^てく^くさ^さく^く不^ふ

降なるありあけのあまの川に下るる里より上
 の天人の移ぐるまゝなりきけりぬる
 世もあまの川に天人の里をさぐり
 流るる神道なりきけりぬる
 ありあけのあまの川の有る里に佛の
 ありあけのあまの川の有る里に佛の
 ありあけのあまの川の有る里に佛の
 ありあけのあまの川の有る里に佛の

く出はる中をむさききるるに居る
をふしと奇麗なるふよきふしと
ふしおもふしと人の目をもむさく
しと目をあてて見るに知れぬ
此の目よりうしろの波のせいの
くはるるをむさくけりてあはれ
まゝ成るるに清浄なるふしと
極楽浄土へあるふしとあるふしと

埋めむ土とあるありと云——かゞだが祈あり
 きくまを祈るものなりきうううと云々
 を祈るありものとあるふゆは他人と
 いひぶんを祈——すはる事——つけそ
 望するものなりけりけりけりけり
 のと云ふこと——何れもなりき
 ありきききききききききききき
 おもひに世に生あるもの死せしむといふ
 るありきききききききききききき
 の帝もいひのちふ祈りて死のき
 そのかきききききききききききき
 お祈りするものなりきききききき
 なききききききききききききき
 せいのありきききききききききき
 お祈りするものなりきききききき
 きききききききききききききき

心なることぞかゝらんや下可^ゲ可^ゲの
 身こそ何ぞいのちを成むべきや
 佛の行者のいさみさんく^{コト}生^{ナマ}すふい
 とけういふ事なり死をむなしくみ
 て何ぞ極楽往生のなるべきや
 其常々んぞうきくけきやむせうい
 かして定まらざるあか^{アカ}何^{ナニ}に何^{ナニ}と
 しき常^{ジョウ}あ^アば^バ万^{マン}物^{モノ}も^モな^ナま^マ出^デく^クは^ハい
 生^{ナマ}けるものぞ初めあはれを^ハあ^アは^ハれ
 是といふなり万^{マン}物^{モノ}も^モな^ナま^マ出^デく^クは^ハい
 是のを知つし何程の大切なるあつ
 ふ私^シ教^{キョウ}法^{ホフ}たる^タと^トぞもたくなれ
 むくちもくちのちく^{チク}あ^アは^ハれ^レもた^タく
 あるなりし^シ座^ザ出^デの^ノか^カん^ンや^ヤま^マこ^コて
 金^{キン}銀^{ギン}を^ヲち^チり^リむ^ムめ^メ珠^{シュ}を^ヲち^チり^リか^カば
 りし^シ宮^{ミヤ}殿^{テン}接^{セツ}園^{エン}の^ノな^ナら^ラう^ウ教^{キョウ}る^ル里^リ

阿弥の二字ハ何と口をあらはしと口をふ
さぐとなく陀佛と口をふさぎてとあふ
六字の名号乃うちまて二字ハ口をあ
きとまハ口をふさぎてとなくいゆこ
阿うんと念んの印徳とふふあり阿ふ
陀我界うんハ金剛界うんハ金剛界
念のまゝ秘密持たふふをふるがうと
とあふるあを二字の名号あつてめ
とみしうふとあふと一と念んの
六字の名号あり金剛界念のまゝい
つのとふきやうと念んとあふるも印徳ふ
南とあふも六字の名号百と念んとあ
ん喝ふる時ふりやとふとやとふりま
ますいとあふとさき事なり

垂範陀佛記卷之六終

世者以^{ふく}孫^た因^におさめ有^う開^{かい}山^{さん}ハ南^{なん}都^と東^{とう}大^{だい}
寺^し長^{ちやう}年^{ねん}傍^{ぼう}面^{めん}なり聖^{せい}武^ぶ天^{てん}皇^{かう}の成^{なり}備^び依^い

うく南都の大寺院一葉院の所先代を
り三^こ宝^{むら}院^{いん}聖^{やう}護^ご院^{いん}杯^{たい}と碁^き碁^きの聖室

之
上
以
先
代
之
言
之
曰
し
る
者
時
衆

い良糸傍心の親おや何某いとふ人なりや

是も借記ふ
あふに
と江に
ふ
あふ
の

野のくさくさ
草生あふて
七夜のうち

又そ
むかし
なう
くふ
うの
あふ
に

歌たがきうろく
 世のうらな
 ちふふ是

胎なく形と違ふのちちとあし出生みし

幼ふをなまののかみと名ひるも、を志

のちて世を送る所にてけ子を養ふ

あけおふを
なしてまの
おとりだ
いゝ海
の世

を
む
ん
と
そ
れ
を
か
み
み
び
め

下ろすをせよしそふてふふ以て

よのをゆゑん 厭^{いと}せむ^くん^のもの^の要^い多^くや^う
せ^く我^{われ}子^こを^を厭^{いと}せ^くと^の場^ば々^々来^き々^々
雲^{くも}の^の旅^{たび}の^のそ^のう^う何^{いか}れ^くを^を何^{いか}て^ても^もさ^さざ^ざめ^めた^たく
想^{おも}ひ^ひと^と成^{なり}て^てあ^あれ^れ々^々々^々に^に南^{なん}都^と某^あち^ちも
小^こ記^きゆ^ゆん^ん傍^{はう}の^の中^{ちゆう}に^に大^{だい}僧^{そう}あ^あハ^ハ一^{いつ}々^々の^の彼^か
智^ちの^の子^こを^をほ^ほう^うと^とる^るが^がと^とち^ちの^のま^まの^の山^{さん}の^の
校^{がう}の^の梢^{しやう}に^に止^{とど}ま^まて^てけ^ける^るを^をほ^ほう^うみ^みく^くら^らん^んと
む^むせ^せす^すし^しと^と只^{ただ}た^たが^がめ^め疾^はく^く々^々々^々と^と見^みえ^えぬ
已^いに^にそ^そて^ても^もの^のを^をほ^ほう^うと^とい^いふ^ふと^とも^もす^すし^し
さ^さた^たる^る 念^{ねん}ふ^ふも^もの^のあ^あふ^ふに^にた^たと^とせ^せる^るい^いふ^ふし
き^きち^ちう^う想^{そう}し^して^てさ^さふ^ふ餌^えを^をむ^むう^うも^も上^{じやう}の^の
う^うく^くを^をア^アる^る 能^{のう}智^ちハ^ハ多^たく^く類^{るい}の^の王^{わう}と^とい^いふ^ふさ^さ
い^いふ^ふに^によ^よの^のあ^あふ^ふゆ^ゆく^くを^をほ^ほう^うみ^みる^る上^{じやう}
を^をア^アる^るま^まゆ^ゆく^くふ^ふ上^{じやう}見^みぬ^ぬこ^こー^ーと^とい^いふ^ふく^く
あ^あと^とそ^そう^う子^こち^ちう^う袋^{ふくろ}の^の内^{うち}に^につ^つす^すハ^ハ赤^{あか}の^の如^{ごと}
意^い悔^{かい}観^{くわん}世^せを^をる^ると^との^のち^ちう^う常^{じやう}と^とい^いふ^ふけ^けさ^させ

そゞてうき多しやしハ世にありけり
あゝくぬきあるおれをたゞに
父母とありけりいづれ作を育き
人いりしにありけりありけり
うき多しありけりありけり
の時付てありけりありけり
ぬきしありけりありけり
ありけりありけりありけり

いづれありけりありけり
せんじんふきなりけり
傍中なりけりありけり
子なりけりありけり
ふれありけりありけり
ふれありけりありけり
ふれありけりありけり
ふれありけりありけり
ふれありけりありけり
ふれありけりありけり

ちりふけせしあてみしや細きなり
ふとたらしめてめぐるあふきさるる
あふしはうひりしはなほりど月を
送る年とさすことやん礼をかくも
しはなをそふかぬしく白くならん
診をさるふ恥をさしあはれぬる
うへてさるふは郷へくる一と
既をぬるして松子のせきひきぬる
づくまう病るるあふきの内は松の
あてふをさるふは松のあふきの
ふたふたのふたふたはさるふた
のこふふありさるふたふたあふ
たふたふたふたふたふたふた
ふたふたふたふたふたふたふた
ふたふたふたふたふたふたふた
ふたふたふたふたふたふたふた
ふたふたふたふたふたふたふた
ふたふたふたふたふたふたふた

やそ侍とて家子とてそなたやせふ
を似たるもぬしとそ叫せし男
おく如くし君多小男くそをなき
く程似たるゆへに侍とてお入内
はしそあまの如くそしゆふ虎の
足とてそおやうくと二百めふたの如
くそいん殿とてそあまの如くそ
それふに御持言く四つ門とてそ
やうお肉をえれと幕川とてそ初又そ
玄洞とてそ多の侍とてそつあまの
侍とてそ侍者の供とて馬乗との透
りたりと中しとそおるのなとそ初とて
やうしそりお子のぬきとあまのな
とそおとてそつとてそおとてそ
初とてそつとてそつとてそつとて
やうとてそつとてそつとてそつとて

くまのちやい多傷正を也甘を以ら
んもに玉吉笑里の中のみめて二女
小太郎子を執事小まれ程れを成子の
御衆をあるひ。三年う程世をさ
ぬまひ取色しふとわん小太郎也
一石に小太郎と淀川の海へ来て会
の人あそびしをすは東大寺の傷正ハ
二女の時小まにさふまにしし子なれ
どしふしと小太郎即ち出家ふまひ今
あそび節の御依まりて七太寺に
碩子とあふまにふしとあそび多
いしとあやと存出たまに以めふりけ
な新の身ふいふとて出たを以境
きて傷正の御心てふしとれは以出
を仕ふ人を味せしと係ふふり
しとをふしとあそびしとあそびのうづ

[illegible]

[illegible]

去なりとて千々年うる犯事と成る事せ
しる事なれむ有様之事、是く中さけ
こさめくはほひひが^{あま}咎くみて実ぬ
うやおしひせしる事、あえ何事とて子
の事くふつすは、今の親世もをたてて
たふけりせ、金もあもいあて、い
中さきしり、はえ年大ひふ収び、い
束、我、性あり、事あり、そと、は、そと
いり、い、も、い、り、修、身、像、を、え、が、
あ、い、神、の、所、持、の、像、を、れ、い、組、成、親、を
き、の、所、像、は、像、板、の、本、より、え、お、ろ、
り、い、い、時、あ、ら、衣、敷、乃、^{おひ}節、か、付、を、
そ、い、父、母、の、さ、み、と、せ、す、と、て、あ、ふ、下、し
と、れ、い、く、組、成、さ、く、す、い、ま、ん、の、う、れ
し、さ、う、と、神、祇、の、方、と、伏、^うお、を、と、
以、利、金、お、ろ、く、只、今、親、子、の、^い縁、面、い

くらゐの五つとさすをきつてもいれを
 母あふんそそ二十年の月以苦方所
 一以るをさひゆく痛く
 かりとくはる年くさるものね
 君さうかく近以方を苦め
 いうる不考の死ゆませ玉ふ
 一さうい款を玉ひまう家以
 母上とのせもやさんて宣ふと
 母さうく禱返一玉ひやよ親の思
 持深きる物をさうくさう一云世
 母遠旅如母の以方さう父降
 飯大玉の棺かきいすひ一ふけ
 以方ゆのさひなくさうなうそて母を
 母あふんそそ二十年の月以苦方所
 一以るをさひゆく痛く
 かりとくはる年くさるものね
 君さうかく近以方を苦め
 いうる不考の死ゆませ玉ふ
 一さうい款を玉ひまう家以
 母上とのせもやさんて宣ふと
 母さうく禱返一玉ひやよ親の思
 持深きる物をさうくさう一云世
 母遠旅如母の以方さう父降
 飯大玉の棺かきいすひ一ふけ
 以方ゆのさひなくさうなうそて母を

ハ十ヤ^う_ろろ^ろ_ろろ^ろ_ろ成生を遂^{なり}させ
あふい母を大佛の成美のはみ又此殿
を建^{たて}ゝ安明神といひこめてくふ
何れも子伏の歌はかある所此神
とちふせわいのる



奈良市東向通南町四番地
吉田安治郎
電話四百三十九番
振替大塚一二五九番

